

グループ C - 第 1 班 「Seize your day! - 迷える学生の発見と支援 -」

はじめに

人間力が備わったモチベーションの高い学生を社会へ送り出すことが、近年の大学には求められている。その反面、学生のモチベーションの低さ、目標を持ち得ない学生への対処に苦慮する現状がある。我々は大学生活の目標を喪失し、モチベーションの低下している学生の発見と対処についての提案を行った。出席情報や成績といった学生プロフィールに対してデータ分析を行うことでモチベーションが低下している学生を見つけ、彼らに対して積極的にアプローチを行うことで、モチベーションの向上を促し、明確なビジョンを持って学生生活を送ってもらうことを目指した。

本レポートの目的は、そのような提案を行うに至った過程を明らかにすることである。そのために以下の 3 つの段階を踏んでまとめた。

- ① グループ内での討議をステージごとにまとめる。
- ② ステージごとに行った討議の方式を紹介し、提出された意見と得られた知見についてまとめる。
- ③ 討議の結果、得られた成果をまとめ、本レポートのまとめとする。

討議内容

以下、討議の内容についてステージごとにまとめる。

ステージ 1 テーマの策定

メンバー全員が、自己紹介を兼ねて一人ひとり各大学が持つ情報に関する問題点と課題について 10 件程度のキーワードをホワイトボードに付箋で貼り付け、例示した。一番多かったのは、「学生情報の共有とその活用」に関する課題であった。

また話し合いの中で、最近の学生に対して、「入学してから、やりがいが見つからない。」「学習やキャリアに対し、目標を持たず、モチベーションが低い。」という共通意識を持っていることに気づいた。この共通意識と課題として挙げた「学生情報の共有とその活用」を併せて考え

たとき、私たちが情報を共有・活用しようとする真の目的は、モチベーションの低い学生を発見・支援する為ではないかということにつながった。ここで、私たちグループの目標とテーマを決定した。

目標：迷える学生を導く為の情報の共有・活用

テーマ：情報というツールを使用し、モチベーションの低い学生を発見・支援する。

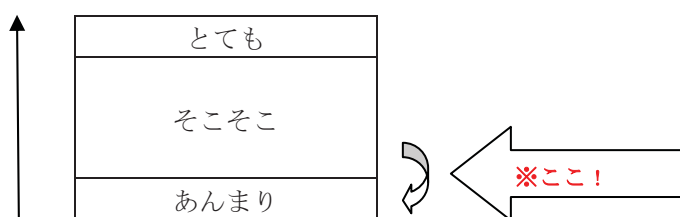
ステージ2 問題の分析と課題の洗い出し

第1ステージ得られたテーマについてより詳しい議論を行った、議論は主に次の4点について行われた。

- ・モチベーションが低い理由
- ・そもそもモチベーションとは何か
- ・モチベーションの高い学生、普通の学生、低い学生、それぞれにどのようなアプローチが有効か
- ・モチベーションを高めることが大学にとって有効か

まず、モチベーションの低い学生とはどういう学生が該当するのかについて話しあった。大学に対するモチベーションとは、基本的には「キャンパスライフ」「学習意欲」「キャリア形成」であり、学生がモチベーション別で以下の三階層に区分できると考えた。

学生の階層：モチベーションがあるかないかで学生を段階分け



とても：なりたい将来像が見えている

そこそこ：将来像がぼんやりしている

あんまり：将来像がない、やるきがない

※モチベーションを失いかけていると思われる学生

もちろん教職員がまずしなければならないのは、「あんまり」の学生の発見であるが、ここで私たちが肝心だと考えたのは、「そこそこ」にいる「あんまり」になる一歩手前の「モチベーションを失いかけている学生」を発見し、モチベーションを上げることである。

はじめ私たちは、このようなモチベーションが低下している学生に対して、目標をある程度絞り込む情報を提供し、目標を持ってもらうため支援する方法や、その為の新しい情報システムの構築について話し合っていたが、途中、「どの大学も多少の差はあるにしろ、ある程度のデータ（材料）を既に持っているのではないか？その情報から必要なデータを抽出することで、問題解決の糸口になるのではないか？」という意見が出て、全員一致で、新たなリソースではなく、今あるデータ（材料）でどう問題解決にアプローチするかに討議内容を切り替えた。

そこで、上述した「モチベーションを失いかけている学生」を発見する方法として、既に持つ

ている学生の履修・出席・成績状況などの学生データを収集し、その分析が有効だと考えた。

まずその学生の特徴を捉え、抽出し、ある一定の特徴にマッチする学生を「モチベーションを失いかけている学生」候補にする。これには、データ量から考えてもコンピューターシステムの活用が望ましい。そして、「モチベーションを失いかけている学生」を発見した後どう対処するか？について考察した結果、ここからはマンパワーが不可欠で、教員や職員が学生を呼び出し面談するなど、対面での対処が有効であるという意見が出た。学生への細かいケアや情報収集はコンピューターでは限界があり、人件費がかかるとしても、するだけの価値があるという意見でまとまった。

ステップ3 テーマと内容の絞り込み

ステージ2で情報を活用した学生支援のシステムについて、更にその運用までのアクションプラン及びシステム運用後の効果の測定に関して模索した。

まず、アクションプランとしては、まずは、学生データ（履修、出席、成績など）の集中管理化であるが、必要なデータをいくつかの部署から収集しなければならないこともあり、逆にデータを他部署または教員へ提供し、共有しなければならないこともある。教職員・大学組織が一連で協働するためには、学内でワーキンググループを構成し、データを活用するためのルール作りを行い、学内周知を徹底することが重要であるという認識で一致した。

そして、重要なのは、運用開始後の効果測定である。効果が分かりやすい数字としては、以下の3つがあげられた。

- ・ 離学率の変化
- ・ 出席率の変化
- ・ 成績への影響

しかし、このデータを見ようとするとき、一時的に上がったからといって必ずしも学生のモチベーションが上がったかどうかは図れない。学生に対して面談後のフォローアップ、データの定期的振り返りといった長期的観察が必要であるとまとめた。

討議による成果

参加したほとんどの大学が「学生カルテ」の導入を検討、もしくは既に着手していた。学生の自立心を育て、そして、社会に適応できる人材へ育成する為に情報というツールの活用方法や支援のあり方について、参加者全員が共通課題として認識し、積極的に意見を出し合い、討議することができた。

昨今の大学を取り巻く環境は年々厳しくなっている。私たち職員は教員と協力して、コンピューターに頼るだけでなく、学生との対話を大切にしていればより細やかな学生サービスを目指さなければならない。

今回の討議を通じて、他大学の状況を知ることが出来ただけでなく、自大学の状況・立場を省みるいい機会になったと思う。ここで得た実践例や提案は、今後の改善に向けた取り組みに大いに役に立つであろう。

以上